

けていることである。むろん、命日の前後には清麗君の実家を訪れ、仏壇に手を合わせながら活動について報告している。3年生は「明るい未来に向けて」と題して実際の学校生活の良かったこと、悪かったことについてディナスカッションをしていく。さらに日常的にも「ハートコネクタクト」が給食時間に給食を持ち寄りディナスクッションしている（教員も参加）。クラスの中にいじめが起きていないか情報を交換しあう。合言葉は「見たら、聞いたら、感じたら」である。変化が気になる子がいればメンバーが声をかけをして、生徒間解決が困難なケースでは教職員に相談するという。大津でのいじめ自死事後についても生徒間の自主的活動があれば「もしかしら防げたかもしれない。」と述べている点は傾聴すべきである。

5 地域の学校参加

子どもたちは、地域の宝である。「子どもの笑い声が聞こえる町は、発展する。」とは、よく言われることであるが、子どもたちを育てる力は、学校にあると同時に、地域の教育力によって大きく左右されるものである。

本件中学校のこれからを支援するためにも、地域住民の多くの方が参加する「学校支援」を考えてほしい。地域による学校参加の一例として次のようなものが挙げられる。

・「学校支援地域本部」の設置

→一部の特定の人たちだけでなく、誰もが参加でき、みんなで力を合わせる「スモールコミュニケーション」づくりを進める。

・「学校支援地域本部」の目的

→教員が子どもと向き合う時間を増やし、多くの大人が子どもを見守る体制をつくるため

地域住民の経験や知識を学校教育に生かすため

地域のきずなづくりによる地域の教育力の向上のため

・具体的な学校支援

→いじめや安全のバトロール（常駐）

学習へのサポート（読書活動の支援、授業の補助など）

総合的学習へのサポート（親が自らのキャリアを語るなど）

学校行事へのサポート

学校の環境整備（花木や芝生の手入れなど）

これらのことは、本件中学校の子どもを支えることになると同時に、地域そのものの活性化につながるはずである。先駆的実践例では、地域の学校支援が親の生きがいづくりにも発展している。さらには、地域それ自体の活性化、さらには高齢者などの

健康増進、生きがいづくりにも発展していくことも見通すことができる。

地域の方々に支えられた子どもたちが、将来にわたって地域の生活と文化を背負い、地域発展の礎となることは、信じてやまない。

6 いじめをおこなないヒドランカリキュラム（学校の理念・伝統・文化）を！

もとよりいじめのない学校づくりは、心理主義的な操作による「信頼関係」づくりの演習や形式的、チャート式的な「スロットツイじめアクションプラン」（2012年度本件中学校）などによって実践、克服、実現できるほど甘くはなかったのである。本報告書での提案もまた形式的な導入に留まっただけでは、何ら状況の改善にはつながらない。

いじめという人権侵害、未来の主権者としての市民感覚育成意識の欠如、こころへの虐待行為、いじめたくなるストレスと思春期特有の自己破壊的で制御不能な暴力衝動、これらに正面から向き合える子どもたちの知力とそれらを支える確かな感性を育てること抜きに、いじめに立ち向かう子どもたちを育てることは不可能である。

それほどにいじめとの対峙は、常に高く意識すべき学校づくりの要となるテーマである。いじめを克服できる担い手を育てることこそ、これからのわが国の最重要課題ともいえる。

すなわち、学校づくりの全体構想の中にいじめ克服という大テーマが位置付けられなければならないのである。図のような全体像の中での学校づくりの実践なのである（図A参照）。本件中学校もこの構造図に照らし合わせて総括し、学校づくりと学校文化の建設の視点で捉え直してほしい。

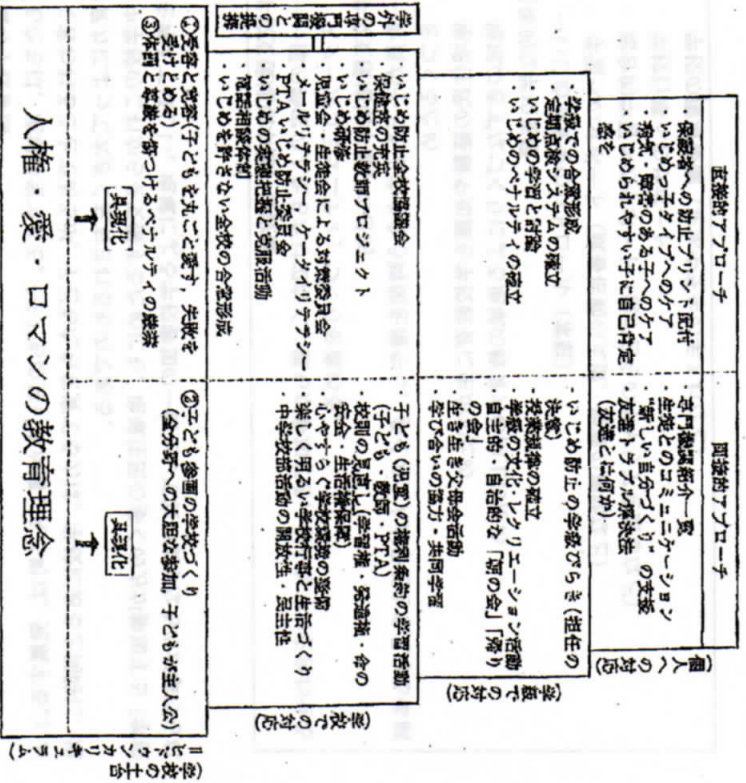
「人権尊重の市民教育、愛とロマン」という高い理念を掲げ続け、的確な事実認識に基づいて喫緊の課題を焦点化し、それに応じた適切な対策を精選して実施する。

いじめの被害を指摘できる人権の感性の育成、対等で平等な生徒間のあるべき姿や関係性について生徒自ら見つめ直し自主的に相える力量の形成をしてほしい。その実践を「学校全体→学年→学級→個人」と段階的に、かつ直接間接双方のアプローチをもって実行してほしい。

継続していじめ克服を掲げた実践を行ないつつけることによって、その学校にはいじめをおこなさない、許さないヒドランカリキュラム（学校の理念・伝統・文化）が生み出されるのだ。

保護者の皆さんへ

図 A 学校におけるいじめ防止実践プログラムの全体像



本件中学校の2年生A君の自死という、あつてはならない事態の中で、保護者の皆様は、数々の思いを寄せられたことだと思えます。ご心労いけばかりかと、お察しします。思春期という多感な時期の子どもたちを育てておられる皆様を思うと、心痛むものがあります。

この間、本件中学校の子どもたちへの聴き取りに際しては、保護者の皆様には、その必要をご理解いただき、ご協力いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

とりわけ、聴き取らせていただいた子どもたちに付き添って下さいました保護者の方々には、皆様のご協力があったこそ、より真相究明に近付けたのではないかとと思っております。

第三者委員会の聴き取りに、最初は戸惑いの気持ちを持たれたことだと思えます。しかしながら、聴き取りを終えるころには、子どもたちも打ち解けられました。子どもたちにも「第三者委員会に望むことは」と尋ねたとき、「聴いてくれて、ありがとうございます。第三者委員会の皆さん、頑張ってください」とのお言葉をいただきました。

さて、本委員会は、事実に向き合い、真の解決の方向は何かと探ってまいりました。完璧な調査や報告というものを期待しつつも、そこまで到達できていないものどかしさも抱えています。しかしながら、それぞれの委員が自らの仕事を調整し、出来る限りの調査を行ってまいりました。

こうしてここに、本件中学校が多くの問題を克服し、安心して子どもが学習できる場となるための提言を出すことが出来ました。是非とも、保護者の皆様には、私たちが導き出した提言をお読み頂き、安心して子どもが学習できる場となる学校作りに参加して頂きたいと願っております。

本件中学校は、過去にも困難な一時期がありました。見事にその困難を克服してきました。今回も、子どもたちや教職員、保護者の皆様、知恵と力を出し合い、相互の信頼回復に努め、子どもが安心して通える学校を作りあげていけるものと信じています。

縁あって、第三者委員として皆様方の学校作りのお手伝いをさせていただきましたことに感謝申し上げます。

提言をお届けする言葉といたします。

提言をお届けする言葉といたします。

提言をお届けする言葉といたします。

提言をお届けする言葉といたします。

提言をお届けする言葉といたします。

提言をお届けする言葉といたします。